

う

だつが上がらない」という言葉

を、聞かれたことはあります。広辞苑では、「出世ができない。身分がぱっとしない。」とあり、【富裕の家でなければ「うだち」を上げられなかったことから転じた」と記されています。

なお、「うだち」は「うだつ」と訛り、^{なま}「卯建」や「卯立」という漢字があてられるようになったようです。

では、この「うだつ」とは何のことでしょう。

『日本建築様式史』では、【民家などの屋根が隣接する部分を一段高くして、小屋根をかけるもの】とあります。ただ言葉が訛って変化したように、言葉が示すものも変化していて少し曖昧です。

古くは、棟束^{むなづか}を指し、次第に妻側の棟束に限定され、さらには、屋根より上に突き出した壁のことも指すようになりました。近年では、袖壁^{そでかべ}と一体化し、漆喰^{しっくい}などで塗り



ちりめん街道にある「うだつ」

込めた重厚なものがよく知られており、屋根より低いものも含まれます。

屋根より高くし始めた頃は、火災の時に、延焼や類焼を遅らせる防火機能が一番の目的としていました。その後、意匠を表す目的を強めました。

ちりめん街道は、通りに沿って古民家が建ち並んでいます。うだつを構えるのは1棟だけです。ゆつたり、じっくりと街道を歩いていただくと見つかると思います。ヒントは「萌葱色^{もえぎ}」です。

ちりめん街道の他にも、町内にはすてきな古民家、町並みが多くあります。時には、気晴らしに屋根を見上げて歩くのも良いかもしれません。

与謝野町教育委員会

古

民家の、表面が波打って、景色が少し歪ゆがんで見えるような、あるいは、小さな気泡が見られるようなガラスをご覧になりますか。これらは、「大正ガラス」と呼ばれ、明治から大正期につくられたものです。今の基準では、強度が足りず、新しく付けることができません。よって、製造もほぼされておらず、貴重なものです。

ガラスが建具として一般に普及するまでは、木や竹、紙などが使われていました。雨戸のように開口部がないものは、開けていなければ、風景が見えませんが、室内に光も射し込みません。外の様子が分かるよう開口部をつくると、雨風が入ってきます。風は障子で遮るとしても、雨には弱いです。雨戸を設けない場合、深い底ひしが必要となります。薄暗い室内が想像されます。

このような中、雨に丈夫で、閉めたままでも景色が見え、たくさんの光が射し

込むガラスが、建材として使われ始めた頃は、とても画期的なことであつたのでしょう。

今に至っては、技術の進歩により、現在のものと比べ、耐風圧性、耐震性、断熱性、遮音性など、多くの点で劣ります。けれども、夏にはどこか涼しげで、冬にはほんのり温かそうな、独特の雰囲気ふんいきで空間を演出する力をもっています。

古民家の大正ガラスは、およそ100年も前から、建物と共にあり、その大切さを感じられます。ちりめん街道でも見ることが出来ます。

なお、この大正ガラス、斜めから見ると、風景がより大きく屈曲し、おもしろさも感じられますよ。

与謝野町教育委員会



ガラスの気泡に焦点を当てて・・・

お

住まいの地域で、
古民家の屋根の上

に、小さな屋根のようなものが付いているのを見られたことはありますか。屋根の赤ちゃんのように可愛らしい印象を受けます。それでいて、建物全体で見ると、外観・意匠のアクセントとなり、カッコいいです。

これは、「煙出し」と言われています。名前の通り、屋内の煙を屋外へ出す働きをします。煙出しは、イロリや台所のように、火を使う場所の上部に設けられました。

イロリや竈^{かまど}（おくどさん）が、ガスや電気コンロに替わり、その近くに換気設備が設けられるようになる
と、煙出しは、本来の仕事（煙を出すこと）を終えま

した。
そのため、修理で屋根を葺き替える時に、取り外されたものもあります。また、取り外さない場合でも、雨や風、雪などが室内に入るのを防ぐため、開口部が塞がれたものもあります。このように、現存しているも



煙出しを備える旧尾藤家住宅

のであっても、本来の機能どおり使われていない場合が多いです。

岩滝庁舎から加悦庁舎まで、路線バスに乗ることがありました。車窓から煙出しを探したところ、乗ったすぐから、ぽつ…ぽつ…と見つけることができました。

ちりめん街道にも、煙出しのある建物があり、比較的まとまって存在しています。まだ見られたことがない方は、一度ご覧にならない方が良いでしょう。

肌寒くなってきた季節、煙出しから、家族の食事をつくる煙が出ていた…と、想像を膨らませてみるのも、おもしろいかもしれません。

与謝野町教育委員会

奥

滝の「ちんざん」か

ら加悦椿文化資料館に渡る橋の手前に、京都府指定天然記念物「滝のツバキ」を詠んだ句碑を見ることができま

す。

千年の心つながて黒椿 汀子

作者の稲畑汀子氏は高浜虚子の孫にあたる俳人で、日本伝統俳句協会の現会長、俳誌「ホトトギス」の名誉主宰です。平成8年、椿文化資料館の開館を記念して開始した「江山文庫俳句大賞」の選者としてこの地を訪れ「滝のツバキ」を詠んだものです。同じ時には次のような句も詠まれています。

ともかくも千年椿みるまでは千年の椿に結ぶえにしか

句にあるように、千年椿と愛称されるこの椿の樹齢は、実はよく判りません。一説には500年とも600年とも、1000年とも1200年とも言われていますが、科学的な根拠はありません。

ところで皆さんのお宅の庭木の椿やご近所に自生するヤブツバキを見ると、木がマツやヒノキのような勢いでは大きくならないことに気付かれ

るのではないのでしょうか。

椿は原種・園芸種ともに生長が遅く、その椿の中にあつてこれほどの樹高・幹周りのものは非常に稀で、国内有数の長寿の椿であるということで、京都府天然記念物の指定を受けています。

また「黒椿」とありますが、花卉の色が特に濃いことなどからくる通称で、植物分類学上は原種のヤブツバキです。庭木や街路樹、野山に自生のものなど、皆さんの暮らしにも身近なヤブツバキ。それが人智を超えた歳月を重ねて屈指の巨木に育ち、人々の心と心、さらには自分自身の心さえもひとつにつなぐ、そんな縁をうたっているのではないのでしょうか。

(与謝野町教育委員会)



稲畑汀子句碑 平成16年設置(設置者:滝区)

土

壁は身近な建築素材です。最新の建物

にも使われますし、与謝野町内でも古民家にかかわらず多く見られます。気にもかけないくらい景色に溶け込んでいますが、意識して見ると、色や質感、仕上げの違いに気づかれます。

与謝野町の古民家の土壁は、黄土色、薄いクリーム色、白色、薄^も萌^え黄^ぎ色…とさまざまです。質感も漆喰^{しっくい}のようになめらかなものから、小さな石や植物が混じった凹凸があるものまであります。その意匠から受ける印象も、重厚さ、柔らかさ、渋さ…と多様で、土壁は町並みの調和をつくりつつ、景観のスパイスともなっています。地元の土が使われたため、色などに地域性も表われるようです。

また、土壁には室内の温度や湿度を調整する機能があり、住環境を快適に保ちます。耐火性能もあるので、紙や布、漆器などの保存にも適し、蔵は土壁で覆ってつくられました。天然素材であり、不要

になった材は自然界へと還ります。人だけでなく地球環境にも優しい素材です。

さらに、伝統軸組構法の古民家は、構造材が変形をしながら粘り強く地震に耐える特徴があります。地震で土壁が剥がれ落ちると、被害が大きく感じますが、土壁が落ちることにより、建物に生じる衝撃が吸収され、柱や梁^{はり}の折れ、建物の倒壊を防ぎます。もちろん、正常な土壁も建物の耐力を向上させます。土壁をバランスよく配置すると、耐震要素として機能します。木や竹で下地をつくり、下塗り、中塗り、上塗りと時間をかけて仕上げられる土壁、知れば知るほど奥が深く魅力的です。

与謝野町教育委員会



土壁がある町並み

時の贈り物 [第86回 生誕 300年 蕪村の屏風]

与

謝野町ゆかりの与謝
蕪村は享保元年

(1716)生まれで、本年
は生誕300年となります。

宝暦4年(1754)に丹
後を訪れた蕪村は約3年を
この地で過ごしました。名
句「夏河を越すうれしさ
よ手に草履」を詠み、ま
た「丹後時代」と称される
ほど多くの絵を描きました。

町内に残された本作「十二
神仙図」は丹後時代の蕪村絵
画中でも初期の大作で、六曲
一雙屏風の十二面に中国の
故事に登場する龍に乗る仙
人や不思議な息を吐く仙人
など、さまざまな神仙たち
の姿や仕草を描いています。

このように各面が連続しな
い屏風や襖を押絵貼と言
い、どの面にどんな絵を貼るかも
創意の見せ所です。屏風の左
右と神仙たちの向きや動きを
意識した配置にはリズム感
があり、変化に富んだ構図の
押絵貼屏風となっています。

本屏風は、江山文庫で開
催中の特別展「蕪村屏風を
のべてまつ」でご覧いただ
けます。(9月4日まで)

(与謝野町教育委員会)



与謝蕪村筆「十二神仙図」押絵貼屏風六曲一雙

ち

りめん街道・旧
尾藤家住宅の

奥蔵に残されていた
さまざまな襖絵の中
から、江戸時代の京
都で活躍した画家、
岸駒（1756〜1839）
が描いた「波濤に岩上咆
虎図」（与謝野町指定文
化財）を紹介します。

右側の二面に岩の上
で四肢を踏ん張り、空
に向かって咆哮する虎
を描いています。左半
分には張り出す枝や波
しぶきをわずかに描く
のみで余白を多く取
り、荒れ狂う海と空の
様子を想像させます。

岸駒は岸派の創始
者となった画家で虎
を得意とし、岸駒以
降、虎図は岸派代々
の家芸とされました。

本図が描かれた文政
十一年当時の日本に動
物園はなく、生きた虎を
見ることは出来ません
でした。しかし岸駒は中
国から虎の頭蓋骨や足な
どの実物標本を入手し、
虎の形態を熱心に研究
したと

いいいます。縞模様で強調
された背の筋肉の盛り
上がりや荒々しい表情
などに、その片鱗がう
かがえないでしょうか。
岸駒の虎の襖絵は、
江山人庫で開催中の企
画展「与謝野動物園」
でご覧いただけます。
（与謝野町教育委員会）



岸駒筆「波濤に岩上咆虎図」
文政十一年（一八二八）

紙本墨画 襖四面
与謝野町指定文化財

引

手とは、開閉の際に手をかけるため、障子や襖などに付けられる金具や緒のことです。よって、建具の開け閉めを円滑にすることが一番に求められる機能です。ただ、小さいながらも、部屋の雰囲気に影響を与える機能も持ち合わせています。



旧尾藤家住宅の引手（月）

現代の引手はシンプルなデザインのものが一般的ですが、古民家では、実にさまざまなデザインのものが見られます。同じ建物内であつても、場所により違うデザインのものがあります。細部まで意匠が施された古民家の魅力のひとつと言えるでしょう。

与謝野町加悦伝統的建造物群保存地区（ちりめん街道）の旧尾藤家住宅

の引手を例にいくつかご紹介します。

旧尾藤家住宅には、襖絵の紅葉に合わせ、立体的な月があしらわれたものがあります。その月部分は磨かれ、かすかな黄色の光を放っています。また、とても可愛らしい千鳥のものもあります。さらに、二階の座敷には、襖の両面でひょうたん型と丸型とデザインの違うものもあります。これらはほんの一部です。

旧尾藤家住宅は公開施設ですので、ゆつくりご覧いただくことができます。館内では、地域の歴史・文化をご紹介します展示もおこなっています。ぜひ、ご来場いただき、各部屋の引手にもご注目いただければと思います。

（与謝野町教育委員会）



旧尾藤家住宅の引手（千鳥）

ち

りめん街道・旧尾藤家住
宅の奥蔵に残されていた

さまざまな襖絵の中から、江戸
時代の京都で活躍した松村景文
(1779年～1843年)が描
いた「白梅に小禽図」(与謝野町
指定文化財)を紹介します。

うす靄のかかった梅林の中、長
く枝を伸ばした白梅が枝先に花
をつけ、幹にはヒヨドリとヤマ
ガラが止まっています。

現在は野生の鳥を捕獲すること
は禁止されていますが、ヒヨドリ・
ヤマガラともに人に良く懐き、平
安時代には貴族たちが愛玩したと
いいます。特にヤマガラは学習能
力が高く、一昔前までは神社の境
内などでおみくじを引かせる芸な
どを披露していました。

松村景文は与謝蕪村に学んだ
呉春の異母弟にあたり、呉春の後
を継いで四条派の画風を確立しま
した。

梅の幹は「付け立て」と呼ばれ
る、筆の側面を使う描法で濃淡を
付けながら一筆で描かれており、
画面全体に躍動感を与えるととも
に、花や鳥たちの存在感を高めて
います。

四条派の特徴として余白が大き
く取られており、その余白が見る
者をあたかも早春の梅園に誘うか

のようです。

景文の襖絵は、江山文庫で開催
中の企画展「与謝野動物園」で
2月から展示しており、3月26
日までご覧いただけます。

(与謝野町教育委員会)



松村景文筆「白梅に小禽図」

文化後半～文政(二八〇～三〇)頃

紙本墨画淡彩 襖四面

与謝野町指定文化財

奥

滝地区の山中深くにたたずむ京都府指定天然記念物「滝のツバキ」。その圧倒的な大きさから「千年椿」の愛称で親しまれていますが、花の色や形にも特徴があります。

下段の写真をご覧ください。左の水盤が「滝のツバキ」の花、右の鉢が周辺に自生するヤブツバキです。どちらも植物分類学上は同じヤブツバキなのですが、並べて見ると「滝のツバキ」の方がやや小ぶりで色の濃い花弁を持つことがわかります。

白黒写真では伝わりにくいですが、実物は気品のある艶を持つ、黒紅色くろべにとでもいうような深い赤色をしています。この深い赤色は、近年すぐ脇に見つかった、自然に種から育ったと思われる若木にも受け継がれています。

さて、江戸時代以降に品種改良されたさまざまな園芸品種の中には、まるで薔薇ばらや牡丹ぼたんのように花弁を広げた椿があります。原生種のヤブツバキは黄色い蕊くさを花弁が釣鐘状に囲みます。「滝のツバキ」は通常のヤブツバキよりも花弁が小ぶりな分、釣鐘状の空間も狭くなります。

花弁自体の黒紅色に加え、巨木についた花を下から見上げると

狭い釣鐘状の花の中までは日光が届かず、手に取るよりさらに暗く見えます。こうしたことから「黒椿くろつばき」と愛称されることもあります。

「千年椿」、「黒椿」、同種の木と別けて唯一の名を付けたくなる心理は、この大樹に人々が神秘的な何かを感じるからこそではないでしょうか。

※「滝のツバキ」は保護のため、柵の外からお楽しみください。

(与謝野町教育委員会)



左が「滝のツバキ」の花